

中原中也

◎特別寄稿

貴重な第一次資料・中也遺稿 中村稔
絆のある風景 荒砂正伸

「中原中也生誕百年に向けて」
中原中也記念館館長 福田百合子

◎常設テーマ展示

「詩人をはぐくんだ風土・山口」

◎特別企画展示

「中原中也と西洋音楽」

◎新収蔵資料紹介

『呉州赤絵大皿』
『芸術派ヴァラエター』

◎企画展示ピックアップ

「中原中也—花と言葉の詩画集—
若林佳子押し花アート 原画展」
「中原中也と流行歌」
「嘉村磯多」

資料の収集について
主なできごと(平成17年度 行事記録)
第11回中原中也賞受賞作品
平成18年度行事予定



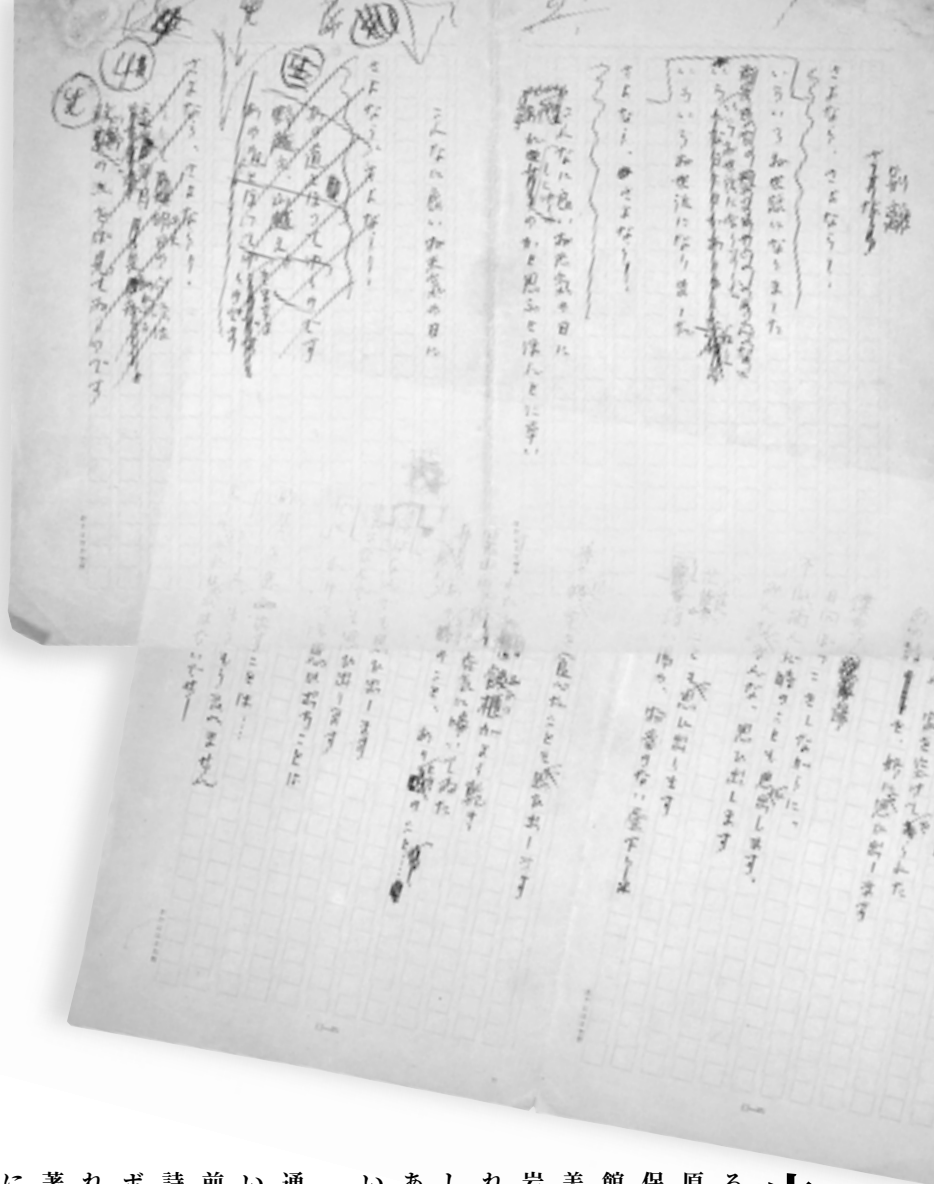
Chuya Nakahara Memorial Museum

中原中也記念館

館報2006

11

Public relations magazine
第11号



特別寄稿 | Special contribution |

貴重な第一次資料 ・中也遺稿

text=Minoru NAKAMURA

詩人

中村稔

中

原家に収蔵されていた中原中也の遺稿類がすべて中原中也記念館に収められることとなった。中也没後、中原思郎さん、中原美枝子さんがご自身の所蔵品以上に大切に保管されてきた中也の遺稿類一切を中也記念館がおひきとりすることになったのは思郎、美枝子夫妻のご遺族、俠太郎さん、克子さん、岩谷文子さんのご厚意によるものだから、これらを無事に、劣化させることなく収蔵、保管していく中也記念館の責務はまことに重大である。それは、これらの遺稿類がかけがえのない第一次資料だからである。

文学者の研究のための第一次資料といえば、通常は初めて作品が発表された雑誌、単行本、いわゆる初出雑誌等をいうが、中原中也の生前に刊行されたのは『山羊の歌』と『ランボオ詩集』だけであり、生前編集し没後刊行された『在りし日の歌』、それに中学生時代の共著歌集『未黒野』を加え、その他雑誌、新聞等に生前発表された詩、評論、随筆等がかなりの数に達するといえ、大多数の作品は原稿、ノート、日記類のかたちで遺されている。それ故、中原中也の場合、第一次資料の大部分はこれらの遺稿類なのである。何故第一次資料が重要かといえば、テキストを決定するさい、つねに第一次資料を参照しなければならないからである。

たとえば、「夏の記憶」という題名で知られている生前未発表の詩がある。この作品は新編中原中也全集には第2巻の「草稿詩篇」中に「夏の記憶」として収められている。これは中原が遺した草稿には「夏の記憶」と表記され、「夏の記憶」とは表記されていないからである。だから、テキストを決定するさい、まず中原が

「夏の記憶」と表記していることから出発しなければならぬ。その上で、数多くの遺稿を参照すると、中原は現在であれば当然「記憶」と表記すべきところを「記憶」と表記していたことが判明する。そこで次の疑問として、これは間違いに気付かずに行ったのか、意識して「臆」が正しいと考えて表記したのか、という疑問が生じる。そうすると中原がその作品を創作していた当時、中原だけが「記憶」と表記していたのか、他の文学者にも同様の表記例があるかどうかという調査が必要となる。たんに一例だけなら、その文学者も中原と同様に書き損じ、あるいは憶え間違いをしていたのかもしれないこととなるが、三、四の用例があれば、むしろ現在でこそ「記憶」に統一されたけれども、当時は「記憶」と「臆」が併用されて、世の中に通用していたという結論になり、「記憶」を中原の誤記ないし誤用として「臆」と校訂すべきではなく、「記憶」を正しいテキストとして採用しなければならない。

じつは1951年に私が第一次の中原中也全集の編集に関係した当時、私自身も「記憶」という表記に気付いていたが、中原の生前、「記憶」と「臆」が併用されていたという事実を知らなかったし、編集時の私はそうした事実を調査しようという考えも思い浮かばなかった。「記憶」に限らず、こうした用例が数多いことを確認したのは、染谷仁子さんをはじめとする新編全集編集室のスタッフの方々が膨大な資料を渉猟し、調べ尽くした努力の成果なのである。

新編全集の凡例の「用字について」の項に「明らかな誤記、誤植の類は校訂する。ただし例外として、以下のものは改めず、底本通りとする」とあり、その1として「当時混用されて

いたと思われるもの（括弧内が通例の用字）」として、以下の用字をあげている。「例 愛相（愛想） 難有い（有難い） 伺ふ（窺ふ） 得態（得休） 椽側（縁側） 横著（横着） 臆怯（億劫） 格講（格好） 記憶（記憶） 吃度（屹度） 自働車（自動車） 泌みる（沁みる） 社界（社会） 小年（少年） 世期（世紀） 切角（折角） 壯嚴（莊嚴） 突嗟（咄嗟） 真面目臭る（真面目腐る） 寸燐（燐寸） 密柑（蜜柑） 臘淚（臘涙 など）」

さらに、「2、語源や漢字の意味などから同義と考えられるもの（括弧内が通例の用字）」として、「潑く（潑く） 成巧（成功） 手切る（手切る）」などをあげ、「3、著者の造語と思われるもの、または著者が慣用的に用いているもの。（括弧内が通例の用字）」として「例 滞びる（帯びる） 隱鬱（陰鬱） 危期（危機） 稀蹟（奇蹟）」等をあげている。これらの2、3の分類に属する用字を校訂すべきかどうかは編集者の見識によるところであって、異論がありうるであろう。そもそも「明らかな誤記・誤植」とみただけでさえ、原資料と対比してみなければ、「明かな誤記・誤植」とみてよいかどうかは判然としないのである。新編全集の編集、校訂は非常に長い時間をかけ、多くのスタッフが協力し、じつに丁寧に行われたのだが、それでも、右に記したような編集者、編集スタッフの考えで製作されている。それ故、新編全集が刊行されたからといって、これによってテキストが確定したとはいえない。数次にわたる中原中也全集の編集にさいし、つねに第一次資料に立ち返って、編集、校訂が行われてきた。もし10年後、20年後にあらためて新全集が編集されるなら、やはり第一次資料の大部分を占める遺稿類にじかに立ち返らな

ければなるまい。1951年ごろに私が第一次全集を編集した当時はまだコピー機さえ存在しなかった。新編全集に至るまでの間、コピー機をはじめ多くの情報機器類が普及し、そうした機器類が大いに利用された。今後の機器類の発達、文学資料の情報充実等を考えると、どのように読み直しされるかも分らない。そのためにも、中原中也遺稿を収蔵、保存する意義、その貴重さは、増しこそすれ、減じることはありえないのである。

このことは用字にとどまらない。本文についても同じである。私が解題を執筆した第四巻「評論・小説」中に、「我が生活」と題する文章がある。「私はほんとに馬鹿だったのかも知れない」と書きおこして、長谷川泰子が小林秀雄の許へ去り、「口惜しき人」になった事情、心情を記した、ひろく知られた文章だが、原稿用紙11枚から成るこの原稿の5枚目の、推敲後の本文に

「然るに、私は女に逃げられるや、その後一日々々と日が経てば経つ程、私はたゞもう口惜しくなるのだつた。——このことは今になつてやうやく分るのだが、そのために私は嘗ての日の自己統一の平和を、失つたのであつた。全然、私は失つたのであつた。一つにはだいたい私

で終つており、6枚目は「それまでに殆んど読書らしい読書をしてゐず、術語だの伝統だのまた慣用形象などに就いて知る所が殊んど皆無であつたので、その口惜しさに遇つて自己を失つたのであつた。らう。」

とはじまっている。「殆んど」を「殊んど」と書くのは中原の慣用的誤記だが、5枚目と6枚目の間には明らかに脱字がある。「一つには

だいたい私はそれまでに」であるか「一つにはだいたい私がそれまでに」であるか、いいかえれば「は」か「が」かどちらかの文字が脱落している。こうした脱字は原稿用紙が次へ移る場合におこりがちなことである。ただ、この脱字が「は」か「が」かを決定することは容易ではない。これは日本語における「は」と「が」との使い分けの難しさの問題でもある。

三上章に「象は鼻が長い」と題する、この使い分けを論じた著書があり、大野晋その他の文章についていえば、「象は鼻が長い」という構文に対比すると、「私は……知る所が殊んど皆無であつたので」となり、「私が……知る所が殊んど皆無であつたので」という構文は成り立ちそうにない。つまり、「私が伝統についての知識が皆無であつた」と「が」を重ねることはありえそうもない。しかし、一方で「私が英語が得意であつたので、同級生を代表して英語のスピーチをすることになった」というような構文は成り立ちうる。ここでも「皆無であつたので」をうけて、「その口惜しさに遇つて自己を失つたのであつた。らう」と続くので、「私が、その口惜しさ」の主語とみることもできる。食事の注文のさい、「私はうな重だ」という用例にみられるとおり、「は」は必ずしも主格を表現しない。

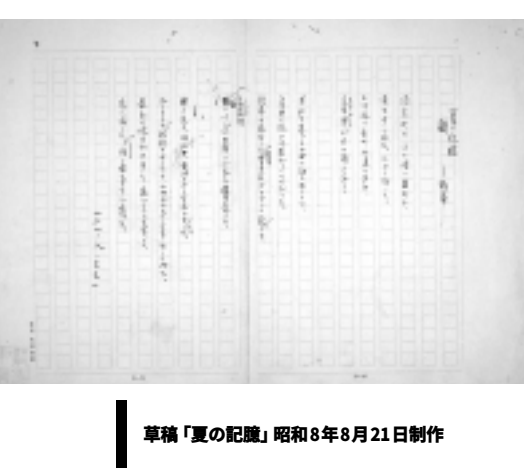
この脱字をどう処理すべきかを迷った挙句、私は従来の全集と同様、「が」を補うことにしたのだから、「は」であるべきだ、という考えを採る人があっても、決してふしぎだとは思わない。

原稿用紙が制作年時の推定の根拠の一つとなることについては、大岡昇平さんが2度にわたり中原遺稿の原稿用紙について論じられ

ているし、新編全集では旧全集に比し、さらに緻密に原稿用紙を分析している。そういう意味でも中原遺稿は重要な研究資料である。ただ、2種類の原稿用紙を同時期に使用した可能性がないとはいえないから、これもあくまで推定の根拠の一つであって、制作年時を決定づけるものではない。

筆跡、書体の変化もまた原稿を見なければ分らない。ダダリストを称していた時代の中原が「な」に「な」を変体仮名で表記していたことは旧くから知られていたし、新編全集でも筆跡、書体の変化について検討されている。中原の遺稿の多くは、「冬の長門峡」などごく僅かな作品を除き、きわめて端正な書体で書かれているが、このように端正な書体で書くようになった時期と長谷川泰子との離別「朝の歌」の制作時期等との関係も、まだ検討する必要があるだろう。

右に示したことは若干の例示にすぎない。中原中也の業績の実体を明らかにするには、第一次資料である遺稿類は依然としてきわめて貴重であり、価値高いのである。



草稿「夏の記憶」昭和8年8月21日制作

一・エピローグ

平成17年3月、目前に迫った若山牧水記念文学館の開館に向けて、展示資料選考は最終段階に入っていた。若山牧水記念文学館は、旧来の老朽化に伴い、牧水生家の前を流れる坪谷川をはさんだ牧水公園の入口に建設された。国民的歌人若山牧水はもちろん、詩人高森文夫を展示の二本柱としている。

若山牧水を語るに多くの言はいらないであろう。自然派歌人として9000首あまりの短歌を作り、自然美あふれる紀行文や随筆を送り出した。旅と酒とふるさとを愛した歌人である。今回は遺墨や作品を中心に牧水の生涯と作歌活動を紹介している。

さて、高森文夫である。高森文夫は、明治43年に東郷町に生まれ、幼少より国木田独歩やロシア文学に親しむ。上京後、学匠詩人日夏耿之介の門をたたき、詩人としての才能と小林秀雄、辰野隆ら文学者との交流を深化する。戦後は教育行政に従事しながら、作品を発表し続ける。目立つことを嫌い、田舎の一農夫としての自分を貫いて平成10年に没。

二・実況

話を戻そう。展示資料選考は高森文夫の蔵書のデータ採り、奥付のチェックと展示品の選別を行った。高森家の都合で東郷町が預かった書籍は900冊ほどで、その中から貴重なものを選別し、さらに展示資料となるものを選んだ。作業は最終日しかも夕方5時が迫っていた。前日からぶつ通しで展示担当者である乃村工藝社のスタッフ野口達郎氏と一緒に

特別寄稿 | Special contribution | II

絆の風景

text=Masanobu ARASUNA

若山牧水記念文学館

荒砂正伸

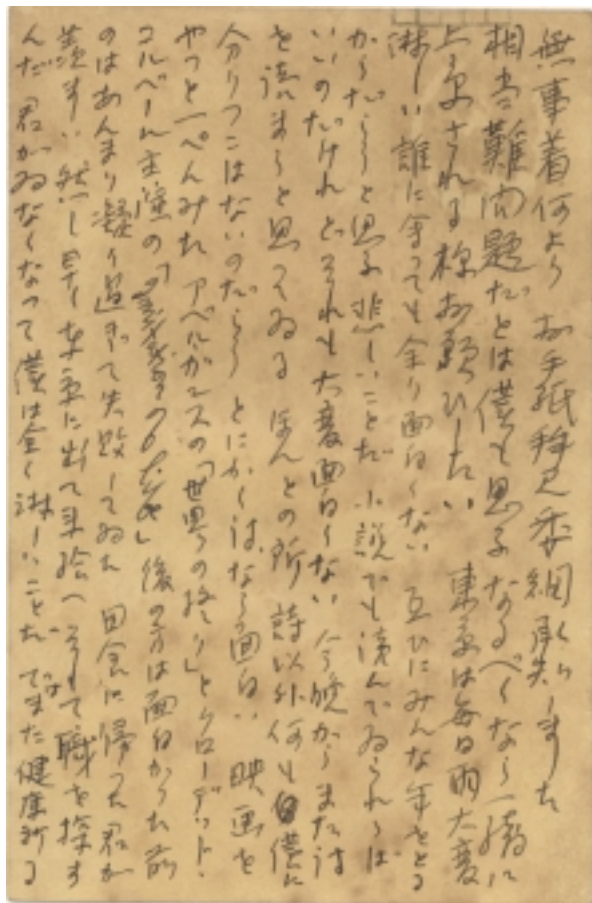


宮崎県の東郷町「入船旅館」物置きで写されたと推定される中也肖像写真。高森文夫撮影。

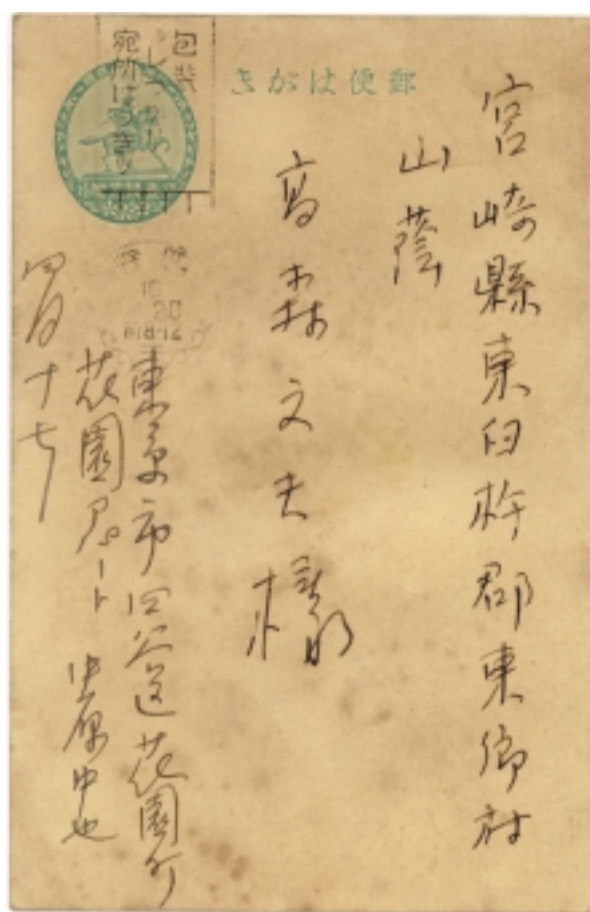
に、およそ200冊の貴重本をチェック。お互いに疲れていた。後2冊で終了という、その1冊。野口氏がタイトルを確認して、ページをバラバラとめくる。中央付近でページをとばすスピードが落ちた。そこには多少変色したハガキが1枚、「やつと見つけてくれたのかい」といわんばかりのプレッシャーを放っていた。野口氏が送り先を確認する。

「中原中也だ!」

作業室のテンションが一気にあがる(といっても総勢3人ほどだが)。面を変えて、本文を読み進めた。



昭和10年4月17日、
東京四谷の花園アパートから出された
中原中也からのハガキ。
びっしりと書かれた中也の近況報告からは、
心を許した友へ精一杯の「甘え」がうかがえる。



三・推考

この2人は昭和6年暮れに出会っている。

一日暮れ時、ひとりで火鉢にあたりながら本をよんでいると、まったく聞きなれない、何か一種、不吉な予感さえする低い、しわがれた声が聞こえ、玄關の戸をたたく音がするので、ガラス戸をあけてみると、深い雪の中に一人の小柄な男が立っていた。雪明りの中に真黒いソフト帽とやはり黒い外套がくっきりと印象的だったが、青白い顔色とじつと見開いた黒い瞳が妙に大きく感じられた。難破船からはい上がってきた船員、それが私の最初の印象だった。――(高森文夫「ある歳末の記憶」中原中也より)

翌年昭和7年秋、中原中也は高森文夫が下宿している伯母の家に引っ越してくる。神経衰弱を昂じていた中原を心配した高森が呼び寄せたのだ。以後急速に親交が深まっていく2人であった。

ハガキが書かれた時点の状況を整理してみよう。昭和10年3月、高森文夫は東京大学仏文学科を卒業し、一旦帰郷する。詩人として生活するだけの才能と人脈を持ちながら、長男であるがゆえに家業を継ぐことを選んだのだ。ただ、その後も折を見ては(口実を作っては)上京し、中原中也や詩友と接している。一方の中原中也は結婚し、愛児文也が誕生。念願の詩集『山羊の歌』も出版され、まさに幸福の絶頂にあった。東京と宮崎、離れてしまった2人であったが、手紙のやり取りを通じて互いの近況を語り合っていたようだ。そう、高森文夫の手元には、80通ともいわれる中原からの書



高森文夫 (1910~1998)

高森文夫

四・追考

さて、今回の資料調査において、中原中也に関する資料が3点確認されたので、ここに紹介する。(詳しい解説は、『中原中也研究』(中原中也記念館発行 第10号掲載の「一枚の写真と高森文夫宛中原中也書簡他の発見」をお読みいただきたい)

一つは中原中也から高森文夫が貰った聖書である。詳しくは省くが、高森が中也のアパートを訪ねた際、渡されたもので、革の表装は折り返しが剥離している。各所に線引きがなされているが、中也自身によるものかは判別できない。

二つ目は中也から贈呈された詩集群である。

- ① 訳詩集『ランボオ詩集』《学校時代の詩》
(昭和8年 三笠書房)
- ② 訳詩集『ランボオ詩抄』
(昭和11年 山本書店)
- ③ 訳詩集『ランボオ詩集』
(昭和12年 野田書房)
- ④ 第二詩集『在りし日の歌』
(昭和13年 創元社)

このうち①から③までは中也の献呈署名が刻まれている。また、第一詩集『山羊の歌』も献呈署名されているが、現在は高森の意向により中原中也記念館に寄贈されている。④については中原中也の没後出版された詩集であるから、正確には本人からの贈呈ではない(詩集の装幀者である青山二郎氏の署名・印入りの葉が挿入されている。いずれにせよ、中原中也が手がけた詩集のすべてが、高森のもとに残っていて、それは中原と高森の関係を証

明しており、それらを列挙展示できることは、わが館にとって大きな喜びである。

三つ目は中原中也の写真である。新聞報道等でかなり大々的に取り上げられたものなので、ご覧になられた方も多いと思われる。この写真は、中也が高森を訪ねて東郷町に来た際に、高森によって撮影されたもの。ただし年代は確定されていない(公式には昭和7年と10年に来訪している)、そのどちらかの可能性がある。積まれた麦わらの上に沈む中也。中也といえは黒いソフト帽をかぶった10代の写真か、背広にネクタイの構えた写真が多いが、今回の写真はリラックスしすぎている。それだけ気を許すことのできる高森という存在であり、また高森もそんな中也を撮ってやろうという、中也への愛がうかがえる一枚だ。で、1枚しか撮影しなかったとは考えにくいので、他にも数枚あったのではないか。現在は確認されていないので、存在しないか、もしくは平成9年の水害の際に流失してしまったのだろうか。

昭和初期、詩人たちの間で何が語られていたのか、残念ながら記録からは微解するにとどまる。しかし互いに強く、深くつながっていたことは事実だ。中原中也の研究がさらに進む中で、その青春時代に、目立たずも強烈に干渉していた高森文夫というヒトを憶えておいてもらいたいと願うのであった。

簡が存在するのだ。

だが昭和12年10月、中原中也死す。高森が受けた衝撃は、激流となって彼の人生を突き動かす。それまでの一切を捨て、支那大陸へ移る。「どうしても身辺から手放したくなくて、中也の手紙だけをまとめて、遙々満州まで持っていたのです。満州ではずっと肌身離さず、懐かしく読み返した。まるで、チェホフのような文章です。」(福田百合子「中原中也・『山羊の歌』初版の周辺より」1996年3月「中原中也研究」創刊号より)

満州では満州映画協会に所属しつつ、「四季」の同人として作品を発表し続けていた高森であったが、戦争が激化し、応召。終戦と共にシベリアへ抑留される。ここに中原中也の書簡群は、赤い土となって失われるのであった。今回のハガキを見て分かるように、高森文夫は中原中也と相当深いところをつながっていた存在であると解せよう。大げさではない。それ

だけに、この中也書簡群が失われたことは、まさに「痛恨の一事であった」(高森文夫談)

しかし1枚だけ、この残されたハガキの意味するところは一体何であろうか。ハガキが挟まっていた本は、リラダンの『残酷物語』フランス語版である。仏文を専攻した高森の愛読書であり、それは同じくフランス語を操る中原中也との接点でもあったのだ。想像できる。故郷に帰り、好きな書物を読んでいる。四月は自宅前に聳える冠山に、山桜が歓喜の花を咲き散らす。微笑む高森のもとへ、一通のハガキが届く。見慣れたその書体に、ふつと頬が緩む。読みかけの本にハガキを挟み、彼から手渡された詩集『山羊の歌』をひらく。あ、確かに存在した時間。響くは、あのしわがれた懐かしき声。高森もまた、彼を必要としていたのだ。

絆のある風景

中原中也生誕百年に向けて

中原中也記念館 館長

福田百合子

明治40（1907）年生まれの中原中也は来年、平成19（2007）年に生誕百年（没後70年）を迎えます。一世紀の推移を大きな節目の一つとして、何か心に残る行事を考えています。

各方面に行事への参加意向や、企画の有無関心の度合いなど、アンケートを行い、それぞれ共催の可能性を確かめつつ、まず実行委員会を結成、発足、裾野の広い生誕百年にしたいと話合っています。

振り返ると、生誕50周年を迎えた際、山口市民会館を会場として、講演・演劇・音楽など中也を偲ぶ会が開かれ、盛大だったことが、今日に繋がっているような気がします。

大岡昇平が熱く語り、山本学が中也に扮し、福島泰樹は帽子を授けて絶叫……。その時はまだ、中也の母フクさんもお元気で、実弟思郎氏が手を引き、いたわりながら舞台上に上がった姿も忘れられません。

僅か30年の生涯（昭和12年・1937年没）を駆け抜けた中也の鮮烈な命の燃焼に、その言葉の結晶に、人々は深い驚きを覚えたのでした。

市民活動として中也顕彰の動きが、自然に起こるのも当然の勢いで、平成タダ実行委員会というグループが登場。中原中也生誕90（マイナス）3年祭のイベントや宣伝パンフレット製作なども、手弁当・手作りの作業で、地道な活動への端緒ともなりました。

平成タダ実行委員会の名称は、中也が京都時代に目を見張った『ダダリスト新吉の詩』に

籠められたダダの精神からです。ダダは新しい価値観、既成概念の転換を目指す文化の方向性を示します。平成の今、改めて中也を通してダダを再認識し、実践しようとの意気込みに溢れていました。

90―3年祭は、生誕90年の3年前から90年に向けて、カウント・ダウンというわけです。

こうした多くの人たちに押される形で、中原中也記念館は開館しました。現在、中也詩碑のある高田公園や、もっと広い郊外も建築予定地の候補に上げられましたが、最終的には今の場所、中也生誕の地、中原医院跡地に平成6年に完成しました。

中也と同じ風に吹かれ、光を浴びることを喜んで下さる来館者の声に接すると、本当に良かったと実感します。

中原家を始め、縁のある方々からは、次々と資料をお寄せいただき、内容も充実してまいりました。そこで分館・新収蔵庫を増設、先年開館十周年には本館の内装をリニューアル・オープンすることが出来ました。

年間を通じてテーマ展示・特別企画展・企画展など、まだまだ手狭なスペースではあります。が、一同知恵をしばった展開を心掛けていくところですよ。

また、フランスでは中也詩の翻訳が刊行され、日本にも届きました。角川書店・新編中原中也全集全5巻別冊1巻も解説篇完備の上、好評発売中、今、中也は国際的にも全国的にも広がっているのです。

山口市湯田温泉街の真ん中に、中也作品の

エネルギーを抱きかかえて、熱く、しかもひそやかにたたずむ中也記念館。

なだらかな山々に囲まれ、清冽な水の流れを巡らせ、澄んだ空気に包まれるふるさと山口。

中也生誕百年に当たって、是非、この空間と時間を、沢山の方々と共有したいと願っています。

平成18年11月には、国民文化祭が山口県で開催されます。「心ときめく文化維新・山口からの発信」をキャッチ・フレーズとして全国に呼びかけています。山口市では「さやかに風も吹いている」をサブ・タイトルに「現代詩・朗読詩」の募集・発表会も行なわれます。県民文化祭とも合同の催しです。国民文化祭を単年度のお祭りに終わらせることなく、翌年の中也生誕百年に引き継ぎたいものです。

「私の好きな中也詩一篇 探してくださいませんか。」「私と中也」「中也と東京」「中也とフランス」「中也とコビー」などなど、など。

山口の市内には、中也生前をご存知の方や語るべき材料をお持ちの方が健在でいらっしやいます。是非お話をうかがう場を持ちたいものです。例年開催の「中原中也賞贈呈式」「空の下朗読会」も取り込んで、生誕百年を、みんなの力で盛り上げようではありませんか。

全国に広がる中也の会の皆さん、機関誌「中原中也研究」の愛読者の皆さんは勿論のこと、地域の方々、近在近郊、遠来の方々を含め、生誕百年を契機として、更に永く、その業績とこころを伝えてゆこうではありませんか。

（協力者をどうぞよろしくお願い申し上げます。）

中原中也

生誕100年の

ロゴが決まりました



平成19（2007）年は中原中也生誕100年です。この記念の年を盛り上げるために中原中也記念館では「ロゴマーク」を作成しました。デザインは防府市在住のデザイナー・林千代氏です。中也18歳の肖像写真で被っている山高帽子、中也が帽子の横を折り込んで平たくしているのをデザインに取り込み、（100）のゼロが眼になっていて、こちらを見つめているかのようです。様々な場面でこのロゴマークをご利用いただき、多くの方とともに中也生誕100年をお祝いできたらと思います。データの使用をご希望の方は中原中也記念館までご連絡ください。ホームページにも掲載しています。



展示風景

詩人をはぐくんだ 風土・山口 yamaguchi

第3回 常設テーマ展示

平成18年2月18日～平成19年2月12日

■自然と文化

山々に囲まれた中に豊かな田園地帯が広がる盆地に、京都にならって作られた町があり、いち早くキリスト教を受け入れた、中世の大内文化の伝統と、幕末に明治維新の原動力となった長州藩以来の政治的な伝統とが息づいている、それが山口の特徴です。

中原中也が生まれ、6歳から15歳までを過ごした山口。その後、京都、東京と移り住み、鎌倉で亡くなった中也でしたが、最晩年には山口に戻ることを考えていました。
故郷に対する愛着と反発を歌った中也、その詩に表れた様々なイメージの中には山口の風土がその源泉となって生きています。中也が過ごした時代の山口を写真などの資料で再現しながら、中也の詩と山口の風土との関係を紹介します。

■帰郷する詩人

中也が長男として生まれた中原家は毛利家の家臣であった家柄で、生家の湯田医院は町で有数の個人病院でした。中也は恵まれた環境の中で育ちますが、勉学に励んで医院を継いで欲しいという両親をはじめとする周囲の人々の期待と、豊かな感受性ゆえの感傷や芸術への情熱のはざまに苦悩します。
山口の自然と、多感な少年期の心情と、両親を中心とする周囲の人々に対する愛憎などを表現した初期短歌や小説「その頃の生活」、山口の風景をほうふつとさせる詩「夏の日の歌」を紹介しながら、当時の湯田温泉街の写真、初出雑誌、草稿などをご覧いただきます。

■足跡

中也にとって、故郷とは懐かしい場所としてあるだけでなく、そこで過ごした時間が大切でした。それは単に過ぎ去ったもの、あるいは

故郷を離れて初めて、人は自分にとって故郷とは何であるかを知ります。しかしまた同時に、時を経て再び故郷の土を踏んだ時、懐かしさとともにかすかな違和感を感じずにはいられません。15歳で山口を離れて後、終生詩人として生きようとした中也は何度も帰省していますが、その度に複雑な思いを味わっていたようです。そうした思いを「帰郷」に見ます。
また、晩年は関東での生活に別れを告げ、山口に居を移すことを決意していました。その計画は死によって果たされませんでした。故郷への思いをその時期に書かれた阿部六郎宛書簡や「蛙声」に探ります。

■甦る情景

は記憶として固着したものではなく、常に生き生きとして流れ続け、生の原動力となるものだったので。

ここでは小学校時代の思い出をモチーフとした「夏と悲運」、同じ題で書かれている二篇の「少年時」に、それぞれの草稿を通じて、詩人として生きる中で故郷で過ごした時間がどのような意味を持っていたかを探ります。

中也は生涯のうちに親しい人との死別を何度も体験しました。その中でも、最初の詩作の契機になったという弟重郎、長男の中也に代わって中原医院を継ぐために勉学に励み病に倒れた弟三三、そして2歳にして世を去った愛児文也。とりわけ、三三と文也については多くの哀悼詩を残していて、そこに故郷の情景が浮かびあがっています。

吉敷川の傍にある墓地がうたわれた「蟬」と小説「亡弟」を、草稿や母フク宛書簡などを通じて、亡児文也を追悼する生前未発表詩に続いて書かれた「冬の長門峡」を、草稿や当時の長門峡の様子を伝える資料を通じて、それぞれの深い悲しみと故郷の情景とのかかわりを紹介します。

その他、固定展示ケースの中には、中也のノート、帰省中に着用していた丹前、建物の見取り図などを中心として、中也の実家であった中原医院の様子をご覧いただけます。

また、吹き抜け壁面の映像展示では、昭和4（1929）年に市制が施行されて山口市が誕生した記念に撮影された映像を、関連する詩とともにご覧いただきます。

中原中也と西洋音楽

平成17年7月27日～9月25日

展示風景

中原中也の生きた明治の末から昭和の初めは、近代日本において西洋音楽が広く普及した時代でもありました。音楽、とりわけ西洋音楽を愛好した中也がそこから何を吸収し自らの詩にどう生かしたのかを、三部構成で紹介しました。

第1部 昭和初期の西洋音楽

このコーナーでは中也が生きた時代の日本の西洋音楽事情と中也との関わりを紹介しました。

○その背景―西洋音楽との出会い

日本が西洋音楽に初めて接したのは、16世紀半ばの天文年間、キリスト教の伝来に伴ってでしたが、その後のキリスト教弾圧によって、こうした教会という場で伝えられた西洋音楽は後世に伝えられることはありませんでした。鎖国時代の空白を経て、幕末の黒船来航によって、再び西洋音楽は日本に伝えられました。それは軍楽隊による行進曲や軽音楽の演奏であり、それが明治以降の西洋音楽普及の出发点になりました。

○音楽教育

それまで全く未知のものであった西洋音楽が一般の日本人に親しまれていくのに一番大きな功績を果たしたのが、「唱歌」という科目名で行われた小中学校における音楽教育です。中也は、小学校では明治44（1911）年から大正3（1914）年にかけて刊行された『尋

常小学唱歌」、中学校では明治43（1910）年に刊行された『中学唱歌』を学んだことは確実で、他にも「六月の雨」に影響を与えたと思われる「笛と太鼓」を収める『教科適用幼年唱歌』（二編下巻）なども学んだ可能性がります。

ここでは、中也が学んだ『尋常小学唱歌』第三学年用や、「唱歌」の欄に「甲」の成績が残る中也の通知票を展示しました。



「通知票」
(下字野令小学校第2学年)

○西洋音楽の普及

西洋音楽の普及に力をはたしたのは、学校教育ばかりではありません。キリスト教会における讃美歌の斉唱や創作、オルガンの演奏もそのひとつで、小学生時代、祖母コマに連れられてカトリック教会に通った中也もまたそれに親しんでいたと考えられます。

また、陸海軍にそれぞれ設けられた軍楽隊の存在も大きなものでありました。当時の軍楽隊は行進曲や典礼曲の他にオペラの歌曲な

どもレパートリーとしており、鹿鳴館の晩餐会などといった場で出張演奏を行った他、出身者によって組織された市中音楽隊が身近な場所で行奏活動を行っていたのです。

小学校入学までの中也は、陸軍軍医であった父謙助の任地に従って、旅順、広島、金沢と移り住んでおり、軍楽隊の演奏を耳にする機会も多かったものと思われます。

最初の本格的なオーケストラの結成は東京音楽学校のもですが、次第に企業が設立した音楽隊や学生と市民によるオーケストラなど、多様な形態のオーケストラが生まれ、大正末には日本交響楽協会や新交響楽団などの職業的なオーケストラも生まれ、演奏会が行われました。

また、明治末に東京の有楽町（現丸の内）に開場した帝国劇場（帝劇）は独自に創設した歌劇部によるオペラ上演を行いました。が、あまり長続きしませんでした。その後、帝劇を舞台に海外の歌劇団が本格的なオペラを公演する一方で、解散した帝劇歌劇部のメンバーたちが浅草を中心によりわかりやすく演芸の要素を強めたオペラ公演を行うようになり、「浅草オペラ」と呼ばれる大衆文化として花開くことになりました。

大正末に上京した中也は、オーケストラやオペラなどの演奏活動が盛んな時期に遭遇したわけであり、書簡には浅草オペラに関心を示している様子もうかがえます。

こうした日本の西洋音楽普及の歴史と中也との関わりを、帝国劇場で行われたオペラのパンフレット等の資料とともに紹介しました。



中也所蔵のSPレコードのレーベル

第2部 中原中也の愛聴盤

このコーナーでは、中也が好んで聴いたと伝えられる楽曲を紹介するとともに実際に展示しました。

中原中也が所蔵していたレコードは17枚が残されており、その内の14枚を西洋音楽が占めています。また、その他にも愛聴したレコードがあったことを、内海誓一郎、大岡昇平、吉田秀和らの友人たちが伝えています。

その中から、マスネの歌曲「エレジー」、ベートヴェンのピアノソナタ「月光」、バッハ「パッサカリア」、チャイコフスキーのピアノ組曲「四季」より「舟歌」の4曲を、中也所蔵および当時発売されたSPレコードの音源によって試聴機で実際にお聴きいただきました。

そこには、はつきりとした旋律をもつ楽曲に愛着を示し、自らもそれを口ずさむという、中也独特の西洋音楽への接し方が浮かび上がっています。

第3部 詩と音楽

このコーナーでは音楽団体「スルヤ」と中也との関わりを中心にしながら、西洋音楽が中也の詩と詩論にどのように反映しているかを探りました。

「スルヤ」はサンスクリット語で太陽神の意味で、諸井三郎、内海誓一郎ら日本の新しい西洋音楽の創造を目指す若手音楽家とその協力者のグループであり、日本青年館で7回の演奏発表会を行い、パンフレットを兼ねた機関誌「スルヤ」を発行していました。諸井三郎は「朝の歌」など5篇、内海誓一郎は「帰郷」など2篇の中也の詩をもとにして歌曲を作曲し、それらの詩は歌詞として「スルヤ」やその他のパンフレットに掲載されました。その他にも、中也は音楽をテーマとした評論「生と歌」「音楽と世態」を書いて発表しています。

展示では中也の詩が掲載された「スルヤ」や諸井三郎の自筆楽譜などを紹介しながら、中也の音楽観とそれが詩にどのように反映したかを探り、中也にとって詩も音楽も芸術として同じ原点を持つものであり、残された詩はそのような最も根源的なところから歌い出されたものといえることを示しました。

○レコードと蓄音機・音楽ジャーナリズム

一般家庭で西洋音楽を親しめるようになったのが蓄音機と円盤式のレコードの発明でした。海外の著名な演奏家の演奏による名曲を収めたレコードが輸入される一方、明治末年頃からは国内でもレコードの生産と販売が始まります。さらに、大正末年に開始されたラジオ放送の影響力は大きく、昭和初期にはひとつの音楽産業として隆盛を極めることになりました。それにもなつて、大正末から昭和初期にかけて、音楽雑誌が数多く創刊され、あらえびす(野村胡堂)らレコード評論家や音楽家たちが筆を執って、西洋音楽の紹介に努め、レコード批評、音楽批評の世界を切り開いていきました。

ここでは、当時の音楽雑誌やレコードカタログを展示し、中也が接した音楽界の雰囲気味わっていただきました。



「朝の歌」 諸井三郎自筆楽譜



日本青年館大講堂

『呉州赤絵大皿』

（工政会出版部 昭和7年4月）

『呉州赤絵大皿』は、中也の友人・青山二郎（1901～1979）が倉橋藤治郎と共に編集した図録で、彩壺会蔵の呉州赤絵大皿33点（図版37図）を紹介しています。

彩壺会は工学博士である大河内正敏が大正3年に発足させた陶磁器研究会で、古陶磁の芸術的鑑賞と科学的研究を主張しました。本書に収録されている陶磁器の所蔵者は彩壺会幹事として活躍した倉橋藤治郎の他、美術評論家、宗教哲学者で雑器の美を唱えた民芸運動の推進者でもある柳宗悦や、建築家で中国古陶磁の蒐集でも知られる横河民輔など。青山は倉橋と共に『古久谷』第一輯も編集しています。

解説は倉橋、装幀は青山が担当。表裏表紙は水色の木目模様。題字は桃色の長方形を背景に筆書き。色彩の対照が印象的な1冊です。この木目模様は、先に刊行されたランボオ著小林秀雄訳『酩酊船』（白水社、昭和6年11月）の本文でも用いられています。

青山二郎は中学時代から絵画や陶器に親しみ、のち柳宗悦、浜田庄司らの民芸運動に関わりました。その鑑識眼を買われ、横河民輔が蒐集した中国陶器2000点の中から60点を選定し、5年がかりで編集した『甌香譜』の他、『浜田庄司陶器集』などを編集しています。また一方で、青山は〈余技〉と言いながら、20



00冊もの本の装幀をしました。

『呉州赤絵大皿』は、陶磁器の目利きとして、また装幀家としての青山二郎の活動をうかがうことができる1冊です。

『芸術派ヴァリエー』第1輯

（赤城閣書房 昭和5年6月）



平成17年度企画展Ⅳ「嘉村礒多」の準備調査中、嘉村礒多の全集未収録作品「姉の手紙」が、新興芸術派倶楽部の作家たちの創作や評論を集めた作品集である『芸術派ヴァリエー』第1輯に掲載されていることがわかりました。

新興芸術派倶楽部とは、「新潮」編集長の村武羅夫が中心となつて結成された十三人倶楽部と、舟橋聖一・今日出海らの蝙蝠座、阿部知二・井伏鱒二らの「文芸都市」、小林秀雄・永井龍男らの「文学」の各グループに、吉行エイスケ・木村庄三郎らモダンイズム作家を加え、総勢32名により結成されました。その顔ぶれは、当時盛んだったプロレタリア文学とは一線を画す新進作家のそろう踏み、といった趣があります。

「姉の手紙」は〈××様〉や〈Y町〉など多少創作を感じさせる部分もありますが、〈江尻〉や〈仁保〉といった実在する地名の記述があることや、登場する人物名が実名と同じことなどからいっても、実際に礒多の手元に届いた手紙のような印象を与える作品です。

他の作品との関連から見ると、この「姉の手紙」発表より2ヶ月前、礒多の第一作品集『崖の下』（新潮社、昭和5年4月）に書き下ろしで収録された「父の手紙」「恋文」はそれぞれ父からの手紙、恋人への手紙の形式をとった書簡体小説です。「姉の手紙」も書簡体小説であることを考えると、礒多は当時、書簡を作品化するに関心があつたように思われます。

企画展Ⅱ

中原中也—花と言葉の詩画集—

若林佳子
押し花アート
原画展

平成17年6月1日～7月24日

平

成16年2月ポプラ社刊行の『花と言葉
の詩画集1 中原中也』に掲載した原

画を中心に、押し花作家・若林佳子氏の作品
と中也の詩とを展示しました。普段の企画展
は原稿や書籍、雑誌といった紙が中心ですが、
押し花という色彩の豊かな、一目観るだけで
感動を起こす作品が並び、華やかで美しい展
示室となりました。若林氏は山口市出身。こ
の詩画集は、立原道造、萩原朔太郎、与謝野
晶子、宮沢賢治と続くのですが、一番最初
に中也を出版されたところに、同郷人としての
中也への思い入れが伺えます。

詩を押し花で表現する、数行に渉る言葉を
一つの絵で表現する、というのは、どうして
も詩の中の一場面を形にしがちに思われます
が、若林氏の作品はどちらかと言えば抽象的
で、中也の詩と上手く響きあっていました。

若林氏の押し花と中也の詩を同時に眼にす
ることで、詩も、押し花も、それだけを見て
いた時とはまた違った印象で、こちらに伝わ
てきました。これこそがコラボレーションと
いうものなのでしょう。



展示期間中には若林氏とお弟子さんと
押し花で絵はがきを創るワークショップを四
回おこなっていただきました。花びらや葉っ
ぱをピンセットではがきの上に置いていくの
ですが、押されて薄くなった植物たちはなか
なかな思うような位置に来てくれません。最後
に透明なフィルムシートを貼って完成。参加
者の方々は、隣りの人の絵はがきを覗いたり、
展示室の原画を見渡したりしながら、自分だ
けの押し花絵はがきを創っていました。

中

原中也が生きた明治末から昭和初期に
かけては、歌劇や浅草オペラ、童謡運
動、新民謡運動などが展開され、その中で制
作された歌が流行しました。また、大正末か
ら昭和初期にかけては、レコード産業の隆盛
やラジオ放送の開始、映画がトキーになる
など、メディアの発達に伴い流行歌が広く大
衆に伝播していった時代でもありました。中
也もまた流行歌を口ずさんだ一人。ときに中
也は吸収した歌詞を新たな形で作品に生かし
ました。



企画展Ⅲ

中原中也と
流行歌

平成17年9月28日

～平成18年1月29日

今回の企画展では、当時のSPレコードや
楽譜などとともに中也と流行歌の関わりを紹
介しました。

一、中也の聴いた流行歌

ここでは中也が聴いた流行歌を当時のSP
レコード、歌詞カードなどと共に紹介しまし
た。紹介した曲は、中原家に所蔵されていた
レコードの内に収録されている「美しき天然」
(武島羽衣作詞、田中穂積作曲、友人の安原
喜弘に宛てた書簡に歌詞を記した「月の浜辺」
(島田芳文作詞、古賀政男作曲、中也がよく
口ずさんでいたという「サーカス(曲馬団の
唄) (西條八十作詞、古賀政男作曲)の3曲。「美
しき天然」は、シンタ(宣伝広告隊)でも盛ん
に演奏されサーカスや映画など興行物の際に
は決まって流されました。随筆「金沢の思ひ
出」には父親に連れられて軽業を見に行った
頃からこの曲に親しんでいたと考えられます。
日本で作られたワルツ第1号、哀感を持った
メロディーが空中ブランコのリズムとよく合
います。詩「サーカス」との関わりを想像させ
る1曲です。

二、流行歌との関わり

中也と流行歌との関わりは中也の残した詩
篇からうかがうことができます。大正期の流
行歌「カチューシャの唄」を歌った女優・松井
須磨子の名前が出てくる「脱毛の秋、彼女の
歌う劇中歌「煙草のめ」の歌詞を取り入
れたと考えられる「自滅」、読売新聞の「流行
小唄『東京祭』懸賞募集」に応募した「(宵の
銀座は花束捧げ)」、映画小唄「愛して頂戴を
エピソードに取り入れた「女給達」のほか、歌
謡を意識して制作されたと考えられる「童謡」

「小唄」など、意外に数多くあります。

流行歌と中也の詩に共通するのは口ずさみややすさ。一方、時代を反映した流行歌が時の流れとともに色あせ、ときに懐かしく思い出されるのに対し、中也の詩が今もなお鮮度を保ち続けているはなぜか。よく知られる「汚れつつまつた悲しみに……」。これは、詩句の繰り返しが多く口ずさみやすい作品であると同時に、〈悲しみ〉という感情が、汚れたり狐の皮裘がちぢこまるといったものとしてイメージ化されています。口ずさみやすさの持つ大衆性と、時代に限定されない表現が一つとなつていくところに、時代を超える中也の詩の魅力があるのではないのでしょうか。

【SPレコードコンサート】

企画展の関連イベントとして、平成17年12月16日、山口市のクリエイティブ・スペース赤れんがにて「中也と流行歌」SPレコードコンサートを開催しました。SPレコード収集家で下関在住の石川秀氏を講師に、中也が青春をおくった大正末から昭和初期の流行歌12曲を手回し蓄音機にて演奏。中也の聴いた時代の音を再現しました。

参加者は「SPレコードを生で聴くのは初めて」という方から「昔懐かしく聞きました」という方まで。「中也が生きた時代の雰囲気を実感させてもらいました。ゆるやかな午後のひとときを満喫しました」などの声がありました。約40名の方にご参加いただきました。



企画展Ⅳ

嘉村礒多

平成18年2月1日

～4月16日

嘉

村礒多（1897～1933）は吉敷郡仁保村（現在の山口市仁保）出身の作家で、昭和初期に「私小説」作家（礒多の場合）は自らの生活を題材にした小説を発表した作家という意味）として活躍しました。

中原中也は友人安原喜弘宛の書簡（昭和7年2月29日付）の中で次のような言葉を残しています。〈嘉村礒多といふ男の小説、これは立派だと思ひました。／僕には、新吉以来のメツケモノのやうな気がします。〉「新吉」とは高橋新吉のことです。高橋新吉の『ダダイスト新吉の詩』（中央美術社、大正12年2月）が中也の詩作に多大な影響を与えたことは周知の通りですが、その高橋新吉の名を持ち出すあたりに、中也の礒多に対する評価の高さをうかがい知ることができます。

また、中也のみならず、昭和初期の文壇においても、礒多の評価は非常に高いものでした。宇野浩二をはじめ、横光利一、今日出海、井伏鱒二など、当時文壇の中心で活躍していた作家、また小林秀雄や河上徹太郎といった中也の友人達も、こぞって礒多の作品を高く評価しています。しかし近年、礒多の作品を愛読する人の数は徐々に減り続け、その名は失われつつあります。

本展では、礒多研究家の多田みちよ氏にご協力を仰ぎ、自筆書簡や礒多蔵書、代表作などの紹介を通して、礒多の文学をもう一度世に問い直します。

「礒多の作品」

礒多は昭和3年に文壇デビュー作「業苦」を発表してから昭和8年に亡くなるまでの約6年間に、およそ80編の作品を残しています。ここではその中から、中也が絶賛したと思われる「途上」をはじめ、「業苦」「崖の下」「秋立つまで」「神前結婚」、そして本展の準備調査中に発見された、全集未収録作品の「姉の手紙」を紹介するとともに、初出誌や単行本を展示し、礒多の文学的業績を振り返ります。

「礒多と故郷」

礒多にとって故郷の仁保は、複雑な意味を持つ土地でした。山口中学を中退し、村役場に勤めはじめ、20歳で結婚、子も生まれますが、妻との不和などで心休まらず、27歳の時ある女性と東京に駆け落ちします。それから礒多にとって故郷とは、罪意識が常に伴う場所であり、帰ることが叶わない場所となりました。しかし、礒多の故郷への憧憬は強く、小説や随筆などさまざまなかたちでその思いを述べています。そして、34歳にしてようやく故郷の土を踏むことが叶いました。ここでは、礒多が使用していた書見台（父の手製）や、礒多の故郷を思う文章、幼なじみとのエピソードなどを展示します。

「礒多の手紙」

礒多が書いた手紙には、彼の作品と見まがうほどの心情の吐露、生活の告白がみられます。ここで展示している手紙にも、家族に無

断で上京しておきながら生活費を無心するものや、実家に妻や子を残して駆け落ちしておきながら妻や子を心配するものなど、礒多の作品にもしばしばあらわれる、自己矛盾とそれが引き起こす苦悩が明確に現れています。ここでは礒多が父の若松に送った書簡の实物を、文面の全てが直接目に触れるように展示します。

「礒多の読書」

ここでは嘉村家に残されていた礒多の蔵書のうち、礒多が青年期に影響を受けた徳富蘆花、近角常観、安倍能成の著作をそれぞれ2点ずつ展示し、彼らと礒多との関係を紹介します。

「朗読・読書コーナー」

礒多の作品は、昭和40年代を境にして徐々に読まれなくなり、現在は一般書店では手に入りにくくなっています。ここでは礒多の作品が収録されている文学全集や文庫本などを手に取って読めます。また「礒多の作品」で紹介している作品の朗読を聴くことができます。

開催後の反響は大きく、新聞各紙、テレビやラジオなどでも報道されました。また、関連事業として行われた、礒多の生涯を追った8ミリ映画「途上の人」（石川秀氏制作）の上映会には、礒多の故郷である仁保の方々を含め、多くのお客様がいらっしゃいました。



1937年、30歳で夭折した中原中也―

没後60余年を経た今日、
その詩はさらに輝き、愛誦されつづける。
角川版旧全集を全面改訂、
30年ぶりの本格的・新編「定本」全集！

新編 中原中也全集

全5巻+別巻

【編集委員】

大岡昇平・中村稔・吉田熈生・
宇佐美斉・佐々木幹郎



各巻、前例のない画期的二分冊構成

◆「本文篇」＝厳密な校訂による新本文の確定
◆「解題篇」＝各作品の成立・推敲過程を詳述

第1巻 詩Ⅰ
新発見詩篇2

第2巻 詩Ⅱ
新発見詩篇2

第3巻 翻訳
新発見散文3

第4巻 評論・小説
新発見草稿4

第5巻 日記・書簡
新発見「療養日記」・新書簡31

別巻 (上)写真・図版篇
(下)資料・研究篇
初公開資料多数

全巻
発売中

造本

四六版・並製・カバー装・美装貼函入
各巻【本文篇】【解題篇】二分冊(分売不可)

第1巻～第5巻、別巻

価格 8,190円～13,650円(税込)

角川書店

〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3
TEL03-3238-8521 FAX03-3262-7734

資料の 収集について

【中原中也記念館 資料収集方針】

第一次資料

1 中原中也遺稿・遺品・資料

2 中原中也関係者資料(文学的資料)

第二次資料

1 作品集

・ 中原中也の生前刊行図書、及び、没後、作品が収録された単行本。

2 全集

・ 中原中也及び関係者の全集。

3 初出雑誌

・ 中原中也の詩が掲載された雑誌。

4 論集

・ 中原中也論及び、中原中也に関連する単行本。

5 特集雑誌

・ 中原中也に関連する雑誌の特集号。

6 関連図書

・ 中原中也と同時代の友人たちの図書、及び、中原中也の作品に関連する図書。

7 新聞

・ 中原中也関連記事

8 映像

・ 中原中也に関連するテレビ番組、映像作品。

9 音楽・朗読

・ 中原中也の詩に曲を付したもの、及び、歌、朗読作品

※ただし、同じ資料は3部までを記念館収蔵とし、3部以上所蔵する資料については、別途有効活用をはかります。

※収集方針に当てはまらない資料については、寄贈を受けた場合でも収蔵せず、別途有効利用をはかります。

中原中也記念館では、資料の収集方針を固め、資料の収集・整理・保存を行うこととなりました。

該当する資料の所在をご存知の方は、ご連絡くださいようお願い申し上げます。

また、中原中也を取り上げた論文なども収集しておりますので、掲載雑誌、抜き刷り等をご寄贈いただければ幸いです。

現在までの収蔵資料と情報につきましては、機関誌『中原中也研究』に「中原中也記念館収蔵資料及び中原中也書誌目録」として一年ごとに掲載しています。

4月19日	企画展Ⅰ 「第10回中原中也賞」(～5月29日)	26日	第15回中也を読む会「帰郷」
22日	第11回中也を読む会「羊の歌」	31日	機関誌「中原中也研究」第10号発行
29日	生誕祭 空の下の朗読会 (於 記念館前庭) 自由参加の朗読 (朗読参加者15名) ポエトリー リーディングライブ (坂田 明／片岡 直子) 	9月10日	中原中也の会第10回大会 主催:中原中也の会 公開講座Ⅱ (於 ホテルニュータナカ) 「季節が流れる、城塞が見える」 講師 辻原 登 
	第10回中原中也賞贈呈式 (於 ホテルニュータナカ) 主催:山口市 受賞詩集 三角 みづ紀『オウバアキル』(思潮社) 記念講演「中原中也と宮沢賢治」 講師 山折 哲雄 第9回中原中也賞英訳本贈呈 久谷 雉『Day and Night(昼も夜も)』	11日	中原中也の会第6回セミナー 主催:中原中也の会 (於 ホテルニュータナカ・中原中也記念館)
30日	中原中也記念館運営協議会	16日	第16回中也を読む会「朝の歌」
5月13日	第12回中也を読む会「羊の歌」	28日	企画展Ⅲ「中也と流行歌」(～H18年1月29日)
6月1日	企画展Ⅱ「中原中也—花と言葉の詩画集— 若林佳子押し花アート原画展」(～7月24日)	10月1日	公開講座Ⅲ (於 山口情報芸術センター) 「中原中也をどう読むか —〈日本近代詩と宗教性〉の問題をめぐる」 講師 佐藤 泰正
4日	中原中也の会第9回研究集会 主催:中原中也の会 (於 軽井沢中央公民館)	22日	中也命日・お墓参り
10日	押し花ワークショップ (於 2F企画展示室) (及び 6月11日、7月22日、7月23日)	28日	第17回中也を読む会「時こそ今は……」
24日	第13回中也を読む会「六月の雨」	11月3日	中原中也記念館運営協議会
7月22日	第14回中也を読む会「夏の日の歌」	18日	第18回中也を読む会「汚れつちまつた悲しみに……」
27日	特別企画展「中原中也と西洋音楽」(～9月25日)	12月16日	第19回中也を読む会 SPレコードコンサート「中原中也と流行歌」 (於 C・S赤レンガ)
30日	公開講座Ⅰ「中原中也と西洋音楽」 講師 樋口 覚 (於 ニューメディアプラザ山口)	1月27日	第20回中也を読む会「北の海」
31日	蓄音機によるSPレコードコンサート (於 1F展示室) (及び 8月28日)	2月1日	企画展Ⅳ「嘉村磯多」(～4月16日)
8月13日	特別企画展プロムナード・トーク(及び 9月24日)	18日	第3回常設テーマ展示「詩人をはぐくんだ風土・山口」 (～H19年2月12日)
		24日	第21回中也を読む会 短歌
		3月24日	第22回中也を読む会「生ひ立ちの歌」
		31日	館報第11号発行

中原中也の会

6月4日	中原中也の会第9回研究集会 (於 軽井沢中央公民館) テーマ「中原中也と立原道造」 共催:四季派学会 講演 「中原中也と立原道造 —相照らすふたつの詩精神—」 講師 宇佐美 斉 パネルディスカッション 「抒情の変容と可能性—四季派をめぐる」 司会 佐々木 幹郎 パネリスト 勝原 晴希 坪井 秀人	9月10日	中原中也の会第10回大会 (於 ホテルニュータナカ) テーマ「大岡昇平の謎」 講演 「季節が流れる、城塞が見える」 講師 辻原 登 アトラクション Avanti(アコーディオン演奏) パネルディスカッション「大岡昇平と中原中也全集」 パネリスト 樋口 覚 宇佐美 斉 佐々木 幹郎
		11日	中原中也の会第6回セミナー 特別企画展「中原中也と西洋音楽」探訪 講師 中原 豊 (於 ホテルニュータナカ・中原中也記念館)

◎第11回中原中也賞

『音速平和 sonic peace』

(思潮社)

みなしたきりう
水無田氣流氏



水

無田氏は1970年生まれで、大学の非常勤講師をされています。2002年6月から雑誌「現代詩手帖」に投稿した詩が次々と入選、2003年4月には第41回現代詩手帖賞を受賞されました。

この一連の投稿詩をまとめて2005年10月に刊行された第一詩集が『音速平和』です。

この状況下、現時点での世界の強度と速度を正確に映し出すこと、それがこの詩集の目標であった。それは恐らく、いや、確実に無謀な試みである。

タイトルに「平和」と冠したのは、シニスムであると同時に希望である。今日、希望はいつそう絶望よりも重く、矛盾に満ちていることを配視しつつ。

こうした詩集の「あとがき」の一節に、作者がことばを通じて現代と正面から向き合おうとする真摯な態度と冷静な視線がよく表れています。

最終選考では、〈荒々しいことば遣いながら、読者を動かす力を持ち、これからの詩の可能性を開いている〉、〈現代の虚無感とたたかう詩のボディを、ここにつくりだしている〉という点が高く評価され、満場一致で選ばれました。

記念館では企画展「第11回中原中也賞」で、水無田氏とその詩の世界を、歴代受賞詩人の活躍とともに紹介します。

Chuya Nakahara prize

第11回目となる今年の中原中也賞の選考は、2月18日に山口市湯田温泉にある西村屋の葵の間（中也が結婚式を挙げた場所として知られています）で行われ、対象となる327冊の詩集の中から水無田氣流氏の『音速平和』が選ばれました。



◎平成18年度 記念館関連行事予定

2006年4月—2007年3月

4月18日	企画展Ⅰ「第11回中原中也賞」 (～7月23日)	9月9日	中原中也の会第11回大会 (於 ホテルニュータナカ)	11月5日	国民文化祭 文芸祭 朗読詩大会 (於 中原中也記念館前庭)
29日	生誕祭 空の下の朗読会 (於 中原中也記念館前庭)	9月10日	中原中也の会第7回セミナー (於 ホテルニュータナカ・中原中也記念館)	12月20日	企画展Ⅲ「日本のダダ」 (～4月15日)
6月10日	中原中也の会第10回研究集会 (於 日本近代文学館)	27日	企画展Ⅱ 「中原中也・詩の情景／絵画の情景 あゝ？ 一山根秀信展」(～12月17日)	平成19年 2月12日	開館12周年 第4回常設テーマ展示 「中原中也とフランス詩」(仮)
7月26日	特別企画展「青山二郎と中原中也」 (～9月24日)	10月22日	中也命日・お墓参り		

※日程等、変更の場合もございます。

中原中也記念館 館報(第11号) 平成18年3月31日

表紙写真 | 中也1歳4ヶ月(1908年8月)の肖像写真 中国・柳樹屯の写真館にて

発行◎ 中原中也記念館 〒753-0056 山口市湯田温泉1丁目11-21 TEL083-932-6430 FAX083-932-6431 E-mail:chuyakan@c-able.ne.jp http://www.chuyakan.jp/

環境に配慮し、用紙には古紙配合率100%の再生紙を使用しています。印刷インキは植物性大豆油インキを使用しています。